ラフカディオ・ハーンと医薬―癒しと救い　①

一畑薬師のこと

中島淑恵*

1. はじめに

富山大学附属図書館には，ラフカディオ・ハーン（小泉八雲；1850～1904年）の旧蔵書がヘルン文庫として収蔵されている。このうち2,069冊が英語で書かれた本，719冊がフランス語で書かれた本，364冊が和漢書であり，これに『神国日本』の手書き原稿2冊を加えて計2,435冊が，あるじ亡きあと富山の地で眠っていることになる。これらの書物の中には，ハーンが没した東京西大久保の書斎にあったものから，アメリカ時代に購入し来日時にはかの地に置いてきたものまであり，『怪談』等の作者として知られるハーンの読書傾向を探るうえで大変面白い資料を提供してくれている。これらの蔵書は，関東大震災や太平洋戦争という大きな災禍を逃れて今日あるという意味でも貴重なコレクションであるが，ハーンが随所にメモ書きを残しているという意味でも研究上大きな意義があるものといえる。

ヘルン文庫が富山の地にもたらされたのは，富山大学の前身である旧制富山高等学校開学の記念に，当地の富豪馬場はる刀自の寄附を得てのことであり，南日恒太郎初代校長とその実弟である田部隆次・重治の尽力によるところが大きい。三兄弟はともに英文学者で，とりわけ田部隆次は東京帝国大学でハーンの教えを受けていた。ハーンは生前富山を訪れたことはないが，富山の地をハーン研究の中心にと願った土地の人々の熱意に支えられて今日まで文庫が守られてきている。筆者は大学における教育研究の傍ら，このような先人の熱意に駆り立てられてヘルン文庫の調査を続けているが，この度『薬学図書館』に連載執筆のご縁を頂いたのをきっかけに，ハーンと医薬とのかかわりについて，「癒し」と「救い」という観点から論じてみたいと考えている。

2. ハーンの身体

ハーンは1850年6月27日，当時英国の保護領であったギリシアのレフカダ島で生まれた。父はアイルランド系の英国軍医，母はギリシア人であった。ハーンの本名は，パトリック・ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn）であり，ファーストネームのパトリックはアイルランドの守護聖人である聖パトリックに，ミドルネームのラフカディオは生地であるレフカダ島に由来するといわれている。ハーンがアメリカ時代以降パトリックを名乗らず，もっぱら名はラフカディオで通したことはよく知られているが，これは，父よりも母を慕っていたためであるとも，文筆活動を始めるにあたって，アメリカではありふれた名であるパトリックではなく，ギリシア的な特異な響きを持つラフカディオを優先したためであるともいわれている。

2歳からは父の郷里であるダブリンで育った。4歳で母と生き別れになり，生涯再会することはかなわず，父も職務のため不在がちであり，ハーンはもっぱら裕福な大叔母の庇護のもとで育てられる。やがてダーラムのアショー・カレッジに入学，寮生活を送ることになり，16歳の時，遊具が当たって左目を失明してしまう。この時期はハーンにとって生涯最大の危機の時代と言っても過言ではなく，左目失明についで父が病死，やがて大叔母が破産して学業を継続できなくなり，退学を余儀なくされる。その後2年間ほど，何をしていたのか未だに解明されていない空白期間があり，やがて1869年，わずかな小銭を携え，遠い親戚を頼って渡米することになる。

ハーンは当時の西洋人としては背が低く，体格も劣っていた。また，左目失明以降は，それを補おうと右目を酷使したためか，若い頃は右目が異様に鋭く突出していたといわれており，さらにその右目も相当強度の近視で，晩年にはかなり進行していたものと考えられている。東京帝国大学の講義で，ハーンがわずかなメモ書きだけを手にして，朗々と講義を行った様子が門弟によって語られているが，それは視力の衰えを補うために講義を入念に準備していたためであるかも知れない。事実，今日残されているハーンの写真は左側を向いたものばかりで，東京帝国大学の教員の集合写真でも，一人だけ横を向いているのが，ハーンの反骨精神を物語っているようでもあり，むしろ微笑ましい印象を与える。

ともあれ，ハーンが生涯視力に悩まされていたことは確かであり，たとえば代表作である「耳なし芳一」の盲目の主人公に強い共感を抱いていたであろうことは想像にかたくない。それについてはいずれ述べるとして，ア

* Toshie NAKAJIMA
富山大学人文学部
〒930-8555 富山市五福3190
E-mail : toshie@hmt.u-toyama.ac.jp

図 1　ラフカディオ・ハーン（富山大学附属図書館蔵）

メリカ時代のハーンの支援者に，眼科医グールド（George Milbry Gould；1848～1922 年）という人物がいたことにも注目しておきたい。西インド諸島滞在中から文通を始め，アメリカに戻ったのちハーンはフィラデルフィアのグールド宅に寄寓している。ハーンとしては物心両面での支援者を得た思いであったが，グールドのほうはといえば，眼科医としての関心からハーンの眼の悪さに着目し，今日病跡学（pathography）とよばれるような関心をもってハーンを観察対象としていたようなふしがあった。また，グールドは眼科医になる前は牧師をしていて，他人を矯正しようとするような高圧的な態度を見せることもあり，やがてハーンとも感情的な対立を起こして決別している。

実は，今日ヘルン文庫に収められている旧蔵書のうち 500 冊余りの本は，ハーンがアメリカ時代に購入し，来日時にはグールドの元に置いてきた本である。カタログ[1]では＊印がついているこれらの本は，係争を経てハーンの死後 1914 年になって初めて小泉家に返還されたものであり，ハーン自身は二度と手に取ることのかなわなかったものである。グールドについては，ハーンと決別しただけでなく，その個性の強さから学会でも多くの敵対者を産み論争を繰り広げた人物であるが，1895 年のアメリカ医学アカデミーでは議長に推されるなど，それなりの成果を収めている。ハーンに関しても，ハーン没後の 1908 年に『ラフカディオ・ハーンについて』[2]という書誌情報のついた伝記を発表している。この著作においても，眼が悪かったことが，ハーンの人格形成や作品にどのような影響を及ぼしているかについて独自の医学的分析を行い，多くの友人や読者の反発を招いたが，これが最初期のハーンの伝記の一つであり，また，とりわけその書誌情報が，後のハーン研究にとって重要な礎石となったことはまぎれのない事実である。また，係争を経たとはいえ，グールドの手元に残された旧蔵書が散逸せずに小泉家に戻されたのも，グールドが資料を大切に保管するという科学者の習慣を身につけていたためであり，書誌情報の整理にしても，常に論文を執筆し

図 2　ヘルン文庫（富山大学附属図書館蔵）

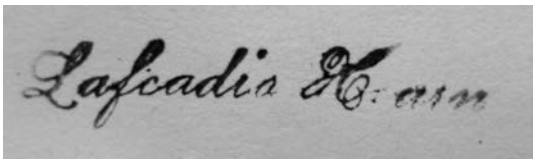

図 3　アメリカ時代の蔵書印（富山大学附属図書館蔵）

続けた医師であったからこそ，若干の遺漏はあるものの，網羅的にリストアップするという手法が取られたもので，毀誉褒貶のある人物ではあったがグールドが眼科医であったことで，ハーン関連の資料が今日追跡しやすくなっていることもまた事実である。とりわけアメリカ時代のハーンの「作品」の大半は新聞にコラムとして執筆されたもので，この記事の網羅的な情報はグールドの資料を出発点として，そこから漏れているものを発見・収集するという作業によって成り立っていることを忘れてはならない。

3.　一畑薬師　その①

宍道湖の北，日本海に至る背骨のような山地の只中にある医王山一畑寺は，「目のお薬師様」として知られている臨済宗の古刹であり，薬師信仰の総本山として知られる。中井貴一主演の映画『Railways』で昨今有名になった一畑電車に乗り，一畑口駅からバスに乗り換え山道を 10 分ほど揺られて参道口に到着する。10 分ほどとはいえかなり急な山道で，筆者は一昨年自動車で訪れたのであったが，ナビが付いていても不安になるほどの山の一本道をくねくねと上ったところで参道口の駐車場に着いた。参道口から寺までさらに 1,265 段の石段が続いている。この薬師は，『ゲゲゲの鬼太郎』の作者水木しげるの幼少時の女中「のんのばあ」が信仰していたことでも知られ，目の守りであると同時に，子どもの守りでもあり，今でも子どもの日や七五三等の行事では多くの参詣者を集めている。ハーンの時代にもすでに名高い寺であったらしく，松江到着後 3 カ月目にあたる 1890 年 11 月には，投宿していた松江の富田旅館の女将と目の悪い女中のノブを伴ってこの寺に詣でている。目の悪い

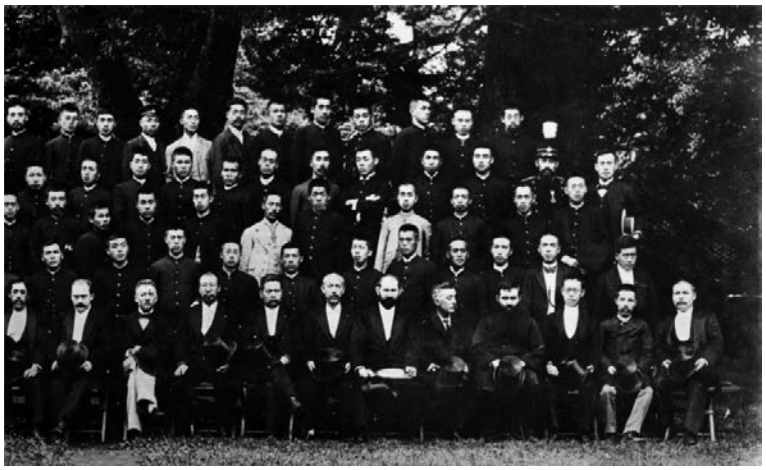

図4　東京帝国大学の集合写真（最前列右から5人目がハーン；富山大学附属図書館蔵）

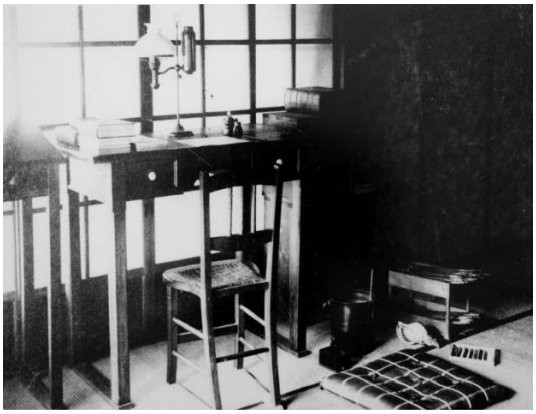

図5　ハーン愛用の机と椅子（富山大学附属図書館蔵）

図6　参道から日本海を望む（著者撮影）

ハーンは，自分の目の悪さは運命と受け入れていたようであるが，他の目の悪い者，弱き者，子どもに対しても常に暖かい心配りを忘れなかった。この時も大枚10円（現在の価値で，およそ20万円）をはたいてお札（ふだ）を授かっている。

ところでハーンは，1890年4月に横浜に到着し，8月に職を得て松江に赴任している。翌年11月には熊本の第五高等学校（現 熊本大学）に赴任するため松江を後にしているので，実は松江には1年と3カ月ほどしか滞在していない。もちろん，滞在期間の短さがハーンにとっての松江の重要性を否定するものではないが，意外と短期間のうちに，古き良き「神々の首都」松江の姿がハーンの脳裏に深く刻まれたことは特筆すべきことと言ってよい。ハーンが参詣した当時はまだ一畑鉄道も開通していなかったため（運行開始は1914年），松江から女性を伴っての道のりは困難を極めるものであったことは想像にかたくない。それでも薬師詣でを目指したのは，霊験あらたかな薬師に詣でたいという気持ちもさることながら，民俗学者としてのハーンの探求心のなせる業であるといえるだろう。

この一畑薬師のことは，ハーンの来日後，初期の著作である『日本瞥見記（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）』のそこかしこに言及がある。たとえば「杵築雑記（Notes on Kitzuki）」[3]では，出雲大社の宮司の広庭で行われる豊年踊りの歌が紹介されているが，「一は出雲の大社さまへ（Ichi-wa Izumo-no-Taisha-Sama-ye）…」と始まる歌で，「五つ一畑お薬師さまへ（Itsutsu-Ichiba-ta-O-Yakushi-Sama-ye）」と言及がある。出雲大社と一畑薬師だけを引用してみると，この地域限定の歌詞のように見えるが，「二は新潟の色神」，「三は讃岐の金毘羅」，「四は信濃の善光寺」と歌われていることから，全国の寺社が歌われているものと考えられる。「や　はと　ない！（Ya-ha-to-nai!）」という合いの手が印象的なこの歌はしかし日本人の眼には，豊年感謝の歌というよりは，手毬歌やお手玉歌のような数え歌を髣髴とさせるものであり（事実「出雲大社」「金毘羅さま」「善光寺」などは数え歌の定番である），本当に出雲の豊年踊りでこのような歌が歌われていたのかについては，更なる検証が必要であろう。ともあれ，この歌の記述で面白いのは，ハーンの本文では歌詞のアルファベットによる音写のみが示され，意味は欄外に注のかたちで示されていることである。たとえば一畑薬師のくだりでは，「五番目，

図 7　一畑薬師（筆者撮影）

一畑のお薬師さんへ（Fifth–to O-Yakushi-San of Ichibata）」（以上，*WLH*, vol. 5, p. 314）とある。これだけでは「豊年踊り」の歌詞として英語圏の読者に意味が通じるのかわからない記述であるが，最後に「日本の読者ならば，それぞれの文の冒頭が歌われている聖地の名前の冒頭で繰り返されているという数え歌の妙をここで味わうことだろう」と説明していることから，この歌が数え歌であり，数字の語呂合わせになっていることを推し量ることができるようになっている。ともあれ，ここでは一畑薬師についての詳しい説明はないので，英語圏の読者にとっては，呪文のような不思議な音の羅列のみが感知されたことであろう。「や　は　と　ない」という合いの手についても本文に音写されているのみで，意味の解説はない。ハーンにとって意味がわからなかったというよりは，その合いの手の音声のほうにハーンの関心があったと考えるべきであろう。ハーンの作品における日本の歌の音写といえば，この出雲の歌よりも，伯耆の国上市の盆踊りのほうが名高いが，この出雲の歌もまた印象深いものであり，闇夜に火をともして善男善女が歌い踊る姿に，民俗学者たるハーンが深い関心を寄せたことは記憶しておいてよいだろう。

ところで，ここまでにハーンのことを民俗学者と何度か呼んだが，これについても少し留保が必要である。というのも，民俗学という学問自体が，ハーンの時代には揺籃期にあったからであり，民衆の伝承や風俗等を実際にその地を訪れて採集するという民俗学的方法自体も，そのような手法に関心を抱き，自らの出自である文化とは異なる地域を踏査する機会を得た者がそれぞれに試みている，という域を未だ出ていなかったはずだからである。ハーンが影響を受けたと考えられる英国およびフランスにおける民俗学の学問分野としての確立は，1878年にロンドンで，1885年にパリで民俗学協会（Folklore Society）が設立されたことに始まる。ハーンの来日が1890年であるから，ハーンの民俗学的取材法が，いかに同時代のトレンドに乗ったものであったか，ということも理解できるであろう。ちなみに日本の民俗学者といえば柳田國男が名高いが，柳田民俗学が第一歩を踏み出すのは，1909年の『後狩詞記』の自費出版からであり，さまざまな欧米の思潮の影響もあったこと，その中には当然ハーンの著作のそれもあったことを考慮しておかなければならない。

もう一つ，連載初回ということで読者の皆様にぜひ提案しておきたいことがある。それは，拙文を読んでハーンの著作を紐解いてみようと思った方は，ぜひハーンの書いた原文のまま，すなわち英語で読んでいただきたい，ということである。ハーンの英文は，英国風の古風な英語ではあるが，簡素な美文であり，高校生ならば簡単に読み解くことができるものである。実用文を好む昨今の英語教科書からは姿を消したハーンの著作であるが，楽しみとしての読書を目指す向きにはぜひ原文で読むことをお勧めしたい。というのも，もともとハーンは『怪談』を含むすべての著作を，英語圏の（あるいは英語の読める欧米の）読者に向けて英語で書いたのであり，そのことを忘れてはならないからである。もう一つの理由として，和訳については，門弟の田部隆次や平井呈一ら先達が数多くの名訳を残しているが，日本語としてあまりにも美文過ぎて，もとの英文の簡素さが伝わらないこと，考証に基づいて『古事記』などは直接原文を引用したりしているので，出典を明らかにせずおそらく音の面白さのみを伝えたいと願ったハーンの意図が伝わらないような印象を与えることもままあるからである。

4.　一畑薬師　その②

いま一つ，ハーンの著作の中で一畑薬師に詳しい言及があるのは，「杵築（Kitzuki）」において，当時ハーンに同道していた学僧のアキラ[4]を伴って，出雲を目指して蒸気船で宍道湖を横断しているくだりで，右手に一畑薬師が見えてくる場面である。ここで，「一畑山」は「薬師如来の寺」として紹介され，薬師如来は「魂の救済者（Physician of Souls）」と説明されている。さらに一畑の如来は，「身体を癒すもの（healer of bodies）」，「盲人に視力を授ける仏（Bouddha who giveth sight unto the blind）」であると説明が付け加えられている。「この偉大なる寺で熱心に祈願すれば，目を病む者が誰も快癒するものと信じられている」というわけである。したがって「数多くの地方から何千という参詣者が訪れて，この長くくたびれる山道の640段もある石段を昇り，風の吹きすさぶ頂上の寺に至る」ことになるが，このようなくだりは，実際に現地を訪れたハーンならではの描写であるといえるだろう。頂上の眺望も，「おそらく日本で最も美しい景色の一つ（one of the loveliest landscapes in Japan）」と形容しているが，これもハーンが実際に山頂から眺めた眺望を，実感を込めて描写しているのであろう。そこで参詣者は，「霊泉の水で目を洗い（wash their eyes with the water of the sacred spring）」，堂の前にひざまずいて，「おん　ころ　ころ　せんだい　まとーき　そわか（On-koro-koro-send-

ai-matōki-sowaka)」という「一畑の聖なる呪文（the holy formula of Ichibata)」を唱えると説明されている。ここでも祈祷文は音写されているだけで，その意味は，「もうはるか昔に忘れ去られてしまっている（has long been forgotten)」とされる。サンスクリット起源のこれらの祈りの言葉は，日本ではその音のみが語り伝えられていて，内容はよくわからなくなっていることが多い，との説明も付け加えられている。余談ではあるが，このように音声にもっぱら関心を抱くのは，乏しい視力を，聴覚を鋭敏にすることによって補っている，というハーンの努力ともつながるものであるかも知れない。来日したばかりの時期のハーンは確かに，下駄の音，柏手の音など，それまでの生涯で聞いたことのない音の横溢にまず関心を寄せているからである。

ところでハーンの原文では，参詣者は「巡礼者（pilgrim)」，参詣は「巡礼（pilgrimage)」という言葉を用いている。この言葉は本来，サン・チアゴ・デ・コンポステーラなどのキリスト教の聖地を訪れる者を指すものであるが，英語圏の読者にこの寺の霊験がわかりやすいように，この言葉を採用したのではないかと思われる。病気の平癒を神仏に祈る態度は，近代科学の常識から考えれば，時代錯誤的な誤った考え方だと思われる向きもあるかも知れない。確かにハーンの生きた19世紀末から20世紀にかけては，産業革命に端を発する近代的な工業や科学，またフランス革命に端を発する理性の支配と諸科学の学問としての創始が急速な勢いで推し進められた時代である。そのようないわば急流の只中にあってハーンが，文明化によって失われて行くもの，合理主義では説明できない不可思議なものに惹かれていたことはよく知られている。

ハーンのこのような傾向は，近代西洋文明に対する批判と，それに毒されていない日本の古きよきものを愛し，急速な近代化の中でそれが失われて行くのを惜しむ気持ちの二分法で説明されることが多い。しかし，実はキリスト教自身が，合理と不合理の矛盾を幾重にもはらむものであり，西洋文明それ自体も，ハーンの生きた19世紀末には，急激に加速される近代化への反発であるかのように，心霊現象や怪奇なものへの関心が高まった時代である。例えば霊水によって病が癒える奇跡を起こす聖地としてすぐ思い浮かぶのは，フランスのルルドであろうが，ルルドで聖母が顕現するという奇跡が起こったのは1858年のことであり，まさにハーンの生きた19世紀末から20世紀初頭にかけて，病を癒す聖地として巡礼者を急速に集めて行ったのである。したがって，ハーン自身も，ハーンと同時代の英語圏の読者たちも，一畑薬師の霊水の奇跡にルルドのそれを重ね合わせて見ていたであろうことは想像にかたくない。

「杵築」の記述はこのあと，アキラとの神仏に関する問答に発展し，仏の数が限りなくあること，神道に至っては八百万の神がいることが議論される。これも，一神教であるキリスト教的な思考とは一見相容れない発想であるが，ハーンが仏教だけでなく，キリスト教以前の古代ギリシアの神々にも関心を持っていたこと，来日直前には善悪とりまぜて様々な精霊の住まうマルティニーク（仏領西インド）に住み，現地の伝承の取材を行っていたことも考え合わせれば，さして突飛な発想ではないことがわかる。キリスト教にしても，とりわけカトリックでは，古代信仰ともつながりのある様々な聖人が，眼病などの病気や怪我を癒す奇跡を行うものとして祀られていることを知る人も多いだろう。

図8　ヘルン文庫前室（富山大学附属図書館蔵）
ハーンの著作，翻訳のほか，研究文献，関連文献が収められている。毎週水曜日にはボランティアによる案内も行われている。

5.　おわりに代えて

筆者はこうして，ヘルン文庫の文献調査をふだん行いながら，ハーンゆかりの地は国内外を問わずどこへでも行ってみることにしている。その地に立ってみなければわからないことがいろいろとあることが経験的にわかっているからである。そしてハーンは，ギリシアに生まれ，イギリスで育ち，フランスをはじめとするヨーロッパ文化の薫陶を受け，アメリカに渡り，アメリカの中でもニューヨーク，シンシナティ，ニューオリンズと全く風土の異なる地を遍歴し，やがてマルティニーク滞在を経て日本に到着した。したがって，ハーンに導かれて赴く旅は，そのような多様な文化，風土をめぐる旅にならざるを得ない。簡単にいえば，ハーンの『怪談』の基層にあるのは，日本だけでなくそのようなさまざまな文化であり風土が混交したものなのである。このようにして見えて来るコスモポリタンたるハーンのさまざまな側面を，この連載を通して読者の皆様にご紹介して行きたいと考えている。

注・引用文献

1）『富山大学附属図書館所蔵ヘルン（小泉八雲）文庫目録改訂版』富山大学附属図書館，1999年．なお，カタログは図書館HPからWeb公開されている．
2）Gould, G. M. Concerning Lafcadio Hearn. Philadelphia, George W. Jacobs & Company, 1908.
3）ハーンの著作は，The Writings of Lafcadio Hearn in sixteen volumes, Boston and New York, Houghton Mifflin Company, 1922により，文中では*WLH*として巻数と頁数のみを示す．なお，和訳は筆者が行った．
4）真鍋　晃．横浜の寺で出会った学僧で，英語に堪能．来日直後のハーンの通訳を務め，松江にも同行．松江滞在の半年間ほどをともに過ごす．

（原稿受付け：2019.5.15）